訳者あとがき

越南義烈史、という本があるのを知ったのは、川本邦衛、長岡新次郎両氏が編訳の『ヴェトナム亡国史』を読んだときである。一九六七年の秋だった。

その義烈史にはじめて接したのは、一九七二年夏の、東洋文庫の閲覧室であった。それから時どき、虫眼鏡を携えて文庫に通い、この縮刷の写真本を読んだ。

巻頭の曾抜虎伝で、まず、その漢文の格調の高さに打たれた。読みすすむうちに、これは、東遊運動にかかわる越南人の、貴重な行動記録だ、とわかった。採った控えをもとにして、七六年十一月に、琵琶湖西畔の和邇で、京都の学生諸君と語ったりした。

七七年の夏、東京麻布の外務省外交史料館で、「仏国内政関係雑纂：属領印度支那関係」の綴りを閲読した。そこに登場する越南人留学生が、〝義烈史〟の人びとと一致するのに、目を見張った。一致するのは当り前だが、ナマの文書は、無限の迫力で読む者を圧するのである。夢中で半月ほど日参した。この文書と〝義烈史〟は、小著『日本のなかのベトナム』（そしえて社　一九七九年刊）の、構成史料の一部になった。

このとき、〝義烈史〟を精読して、できれば邦訳してみたい、という気が起きた。外務省のは、在

日越南人を追いかけ取締る報告文書である。これだけでは片手落ちで、越南人には、彼らの運動を紀念した〝義烈史〟がある……。そこで、東洋文庫に頼んで、〝義烈史〟写真本を複写してもらった。

邦訳の気は起きたものの、それからは公私ともにあわただしくて、何年かが打ち過ぎた。写真本は、何にしろ字が小さい。ましてその複写の字は、筆画が微妙にくずれていて、さらに読みづらい。これを相手に、ゆっくりと書き写すのが先決で、そのためには、まとまった時間が要るのである。

一九八二年の四月から一年間、勤め先きの立教大学で、研究休暇を受けた。休暇を義烈史に充てることにした。そのとき、刀水書房を創業して間もない桑原迪也氏に、出遇った。桑原さんとは、山川出版社に居られたときから、因縁がある。出すモノはないかと問われて、義烈史をしゃべって、ただし、何年かかるかわからない、訳稿が出来上ったら、最初に読んでいただきます、催促だけはクワバラクワバラ、とわらって別れた。

さて仕事は、写真本の筆写に始まった。筆写とは、一字一字を書き写しながら、読んでゆくようなものである。目と、手と、アタマの連繋作業のこのなかで、私は、〝義烈史〟が発する悲情の調べを、骨身に泌みて味わった。

写し読みおえたとき、私に邦訳の気力は湧かなかった。その死をふと疑がわせる、それが〝悲〟というものであるか、やりきれない人間の死の連続であった。

しかし〝義烈史〟は、私に邦訳の魅力を棄てさせてくれなくて、私はその夏、潘佩珠の〝年表〟（正確には〝自判の書〟）の越語訳本を読んで過ごした。支えてくれたのは陳徳江（チャンドオクザン）さんだった。

秋が過ぎ、冬になって、ぼつぼつと訳しはじめた。気候も悪かったが、四十七の死との対決は、身にこたえた。訳し了えて、〈訳者瑣言〉を附けたときは、八三年三月の末。庭のユキヤナギが、死霊の精のようにゆれていた。むかし、宋の司馬光は、『資治通鑑』二百九十四巻を編述して、「臣ノ精モ魂モココニ盡ク」といったが、わずか二巻の『越南義烈史』を訳して、精魂つき果てたとは、なんとも情けない。こうして二度とない研究休暇はおわってしまった。

四月に始まった大学院の演習で、教材に〝義烈史〟を使った。院生の楊中美、加藤治子の両君と、立教の講義を御担当の高津茂先生と、次年度には院生の早川雅美君が加わって、〝義烈史〟を読み通した。〈行進曲〉をフルートで唱って、隣りの研究室から、五月蠅いと苦情が出たこともある。高津さんは、越訳本（これは古田元夫さんのご好意で拝借した）ではこうだ、楊君は、この不明字はこの漢字だと、甲論乙駁、結局、判らぬところはわからぬ、で通した。

こんななかで、原本に会いたい、という思いが募った。〈瑣言〉にも書いたように、然るべき底本が相い整ってこそ、訳業は成り立つ。そこで、一九八六年の夏に、講談社の『本』誌編集人、鷲尾賢也さんからの執筆依頼に、しめたと、同誌に「越南義烈史」と題する小文を掲げた。原本探し、迷子探しの広告文である。だが甘かった、反応は無かった。

さあこうなると、とにかく訳書を世に問うて、原本をたしかめたい、と念うのが人情だろう。しかし、訳稿には、未詳の固有名詞が二つある。ひとつは地名で推定できるが、いまひとつの中国人名がわからない。ままよ、解けるまで待とうと極めこんで、また何年か過ぎた。

一九九〇年の春に、それが解けた。解けてみれば、コロンブスの卵だった。途端に私の肩の荷が降りた。降りたら桑原さんの顔が浮んだ。一〇年も前のことだから、彼はもう忘れているだろう。いるかもしれぬが、約束した者の義理がある。複写の訳稿を、隣室の富田虎男先生に托して、私は半年間の入院生活を送った。

桑原さんは、一〇年前を忘れていなかった。だけではなく、これを刀水書房で印に付す、という。一九九〇年の暮れのことだった。ニッポンとベトナムとの関わりの歴史を識る史料としても、上梓のイミがある、というのが刀水書房編集部の、中村文江さんの主張であった。

かえりみれば、〝義烈史〟とつき合って二〇年、私の、私たちのいとなみが、その訳述のでき栄えはともかくも、一書に鏤刻される。私の眼はうるむ。義烈史の著者、鄧搏鵬君流に言えば、〝越南義烈史の日本語訳本をなぜ作るのか、私にはわからない。ただ、義烈史の志士たちが、夜ごと枕に立ちあらわれて、訳書を出せと強いるのだ……。〟これが、二〇世紀初頭、日本に遊学したベトナム人に捧げる、二〇世紀末の日本人の責務なのかもしれない。

以上、初読から刊行までのあらましを述べて、かかわったすべての方がたに、あつくおん礼を申し上げる。

一九九一年四月二四日記。

附記。弔詩・輓聯の原文はおおむね正字を使ったが、梦（夢）字だけは、そのままのこした。